

みると、必ずしもその他の儀礼、鳥葬儀礼や浄化儀礼と比べて、それほど古い儀礼とは言えない。なぜなら「ナオジョテ」という言葉自体、十五世紀頃から、本来、聖職者になるための儀礼を指していた言葉が、一般教徒のクステイ授与に使われるようになったとされているからである。聖典『アヴェスター』やパフラヴィー文献、そして『リヴァーヤット』には入信儀礼を示す言葉も、入信儀礼を記述する箇所もない。これらで記述されているのは、聖なる紐であるクステイを結んでいるか否かということである。つまり本来、クステイそのものを授与されることよりも、そのクステイをしているか否かが重要視されていたわけである。しかし後世の歴史においてパールシーは、一般教徒にクステイ授与の重要性を示すために、ナオジョテという新しい儀礼を創ったのである。

次にパールシーにとってナオジョテを受けるということは、その後に、充実したパールシー・コミュニティ内の慈善事業を受ける資格を得るといふ、重要な社会的意義も持っているのである。パールシー・コミュニティにおける慈善事業は、本来、パールシーがパールシーのために用意したものであることから、現在まで、それを利用できる資格を持つものはパールシーのみとされている。そしてパールシーの理解ではナオジョテとはゾロアスター教徒になる儀礼であり、そして建前上、ナオジョテを受けないパールシーはいないことから、パールシー・ゾロアスター教徒ということになる。つまりコミュニティ内の様々な慈善事業を受けられる者は、パールシーでありゾロアスター教徒であるといったことが、当然となっている。それ故、

ナオジョテを受けないといったことは、彼らにとって考えられないことなのである。

さらに、ナオジョテには儀礼後にパーティをとまなうことが一般的なスタイルで、この内容は年々豪華になる傾向にある。これらのパーティを請け負うのが、パールシーが経営するパーティ業者で、多くの受注が一業者に集中する。またナオジョテの儀礼を行う聖職者にも、ご祝儀が出る。特に収入が寺院からの給与だけの聖職者や、高齢な聖職者にとってナオジョテで得る収入は重要である。しかしパールシーの人口減少や外婚の増加、晩婚化が、パーティ業者や聖職者のパイを、ますます小さくしていくことが容易に予測できる。聖職者は当然のことながら、パーティ業者も、今後、どのように活路を見出していくかが、パールシー・コミュニティが抱える問題の一つとなっていくと考えられる。

ドイツのヒンドゥー教

——シュトゥットガルト等での寺院調査から——

山下 博司

南アジア系ディアスポラにおけるヒンドゥー教の事情を精査するため、ドイツ連邦共和国シュトゥットガルト市とフランクフルト市に赴いてヒンドゥー寺院(計五箇所)を訪れ、寺院の様子を観察するとともに、管理者、司祭、信者等にインタビュー調査を行った。

ドイツのヒンドゥー教についての情報は極めて乏しい。インターネットなどのソースを便宜的に参照すれば、「ヒンドゥー

寺院」と称するものが、四〇ヶ寺程度リストアップされている。同一寺院(すなわち重複)とおぼしき事例も見られ、新しい寺院がお披露目されたとのニュースも時折ウェブ上に現れるなど、数的実態の把握は至難である。批判的に諸寺院と所在地を吟味していくと、寺院は主に都市部を中心にドイツ各地に分布しており、寺院名や主神の名称に照らせば、その過半数がタミル系のものであることが推定できる。

実際に二都市のタミル寺院を訪れると、タミル系といえども、南インド・タミルナードゥ出身者ではなく、スリランカ系のタミル人が営む寺院が殆どであることがわかる。一九八三年の北スリランカでの反政府ゲリラ闘争の本格化を受け、難民として到来した人々が寺院を興し、集まる信者も関連の人々が大半をなす。(タミル難民とはほぼ同時期に、アフガンからの難民も多く流入してくる。ドイツにあるアフガン系のヒンドゥー寺院、たとえばフランクフルトのアサマイ寺院なども類似の経緯を辿って今に至っていると見られる。)

二都市を含むドイツのタミル系ヒンドゥー寺院の特徴として次の八点を指摘し得る。

- (一) タミル系女神、ガネーシャ、ムルガンを主神に祀る寺院が多数を占めるが、何れも複合寺院をなし多種の神格を合祀している。これは信者の信仰の要求に応えるものである。
- (二) スリランカ北部・ジャフナ地方で人気のあるナーガブーシャニ女神を祀る寺院がフランクフルトを含め数カ所存在する。しかしこれらに横の関係、組織的關係は乏しい。
- (三) ガネーシャ寺院の多さは、移民先での成功を期する心情

と事情とを反映している。

- (四) 資金的制約と信者集団の規模的な要因により、(一部の例外を除いて)寺院の規模は総じて小さく、やや不便な場所に立地する傾向が強い。ひっそりと営まれている。

(五) 主任司祭にはインド出身のバラモンもおり、その場合ヒンドゥー儀礼のスリランカの変異は必ずしも顧慮・重視されない。彼らの殆どはディアスポラで司祭としての就労経験を有する。原則的に単身赴任で、ヴィザを更新しつつ本国の家族に送金している。

(六) 寺院構造の面で内陣の画定が曖昧である。非バラモンの司祭助手やボランティアと主神との接触も時に許容される。それに伴い、浄不浄の觀念が事実上稀薄になる。被雇用者に過ぎないバラモン司祭の、浄性の維持に関わる基準が有名無実化する様相が見られる。

(七) 週ごとのスペシャル・プージャー、盛大な年祭の挙行、(プラーサーダムの名目で)食事を振る舞うことなどを通じて、信者が寺院を訪れる機会を創出し、集金に努める。

(八) ドイツ滞在中のインド人技師なども参拝に訪れるが、人数的に卓越せず、寺院の行事や管理運営などへの参与度・貢献度も低く、信者集団の重要な要素を構成しない。

ドイツには、タミル系のヒンドゥー寺院のほか、前述のアフガンからの移民(多くのスィク教徒を含む)も寺院を営んでいる。前述のアサマイ寺院では、広いホールをもつ多層の建物内に、祭壇や壁面にヒンドゥーの神々と並んでナーナク等の肖像画も飾られ、北インド・ヒンディー語圏のヒンドゥー教徒に加

え、多くのスイク教徒も集う場になっている。グルドワラはドイツ全土で三〇か所ほどを数え、前述の二都市にも設けられている。

二都市のヒンドゥー寺院は総じて難民が設立した歴史を有し基本的に特定集団の信仰の場として機能しているが、タミル系寺院の場合、それがより際だった様相をみせている。

ロバート・スミッソンのアースワーク

中島和歌子

アースワーク (Earthwork) と称される芸術運動の名称は、一九六八年アメリカ、ニューヨークにおいて、ロバート・スミッソン (Robert Smithson) ら五名が主催した展覧会「Earth Works」に由来する。アースワークとは端的に土木工事であり、土砂、石、地面など、加工されていない自然の素材そのものを使用した作品であることが特徴であるため、絵筆の代わりにブルドーザーを用いる、という表現も知られている。

このアースワークの中心人物であるスミッソンは、一九七〇年にユタ州のグレイト・ソルトレイクに土砂を運んで、渦状に埋め立てて突堤を構築し、「スパイラル・ジェッティ (Spiral Jetty)」という作品として発表した。「スパイラル・ジェッティ」は、湖面の下降に伴っていったんは水没したが、水位の上昇によって浮上することもあり、バクテリアの棲む赤い水と、析出して突堤に付着した塩の白が対照的な光景を織りなしている。

スミッソンは本作と同名の映像作品「スパイラル・ジェッティ

イ」も残しているが、このフィルムにおいて彼は、ヘリコプターによって上空から突堤を撮影している。フィルムの終盤では、岸から渦の内側へと向かって突堤を走っていくスミッソン自身をヘリコプターが旋回しながら追うようにして撮影を行っているが、ここには、渦的な形状の作品、その渦をたどるスミッソン、そしてスミッソンを映すヘリコプターの航跡、さらにはフィルムの巻かれた形状までも含めた渦動の重層性が見出される。

この多重かつ渦的な動きによって強調されるのはなにか。渦の「中心」であり、中心の有する誘引の力であるだろう。本作の撮影時に、渦の中心部分にあたる湖面に太陽を映すようにというリクエストがパイロットに出されていたことにも注目したい。水面に反射した太陽光が湖と突堤を覆うように広がってゆく場面は、突堤から銀河への変容という解釈もなされている。これはスミッソンが六八年に体験した眩暈、別世界にいるという感覚、恒久性の感覚とリンクする情景であろう。

次に、右記との比較検討を試みる対象として、一九九〇年代以降のラビリンス・ムーブメント (Labyrinth Movement) に着目してみたい。ラビリンスⅡ迷宮は、それ自体が渦的なかたちをした図像である。近年においては、迷宮内の通路を歩くことによる瞑想・祈りといった実践がアメリカを中心に普及しているが、このような事例においては、迷宮の中心へと向かう身体的な渦動と、実践を行う各々がそれぞれの中心性を自由に探求する、いわば霊的な渦動が層をなしている構造が見受けられよう。そのため、渦動および中心の重要性という観点におい